

# 決戦下の大學

學長 神戶正雄  
法學博士

此に一文を草しつゝある其の瞬間にも、苛烈なる決戦が西南太平洋、ソロモン群島のレンドバ、ニューギニア諸島、乃至ニューギニア島に於て行はれつゝある。其處に於ける皇軍將士の晝夜を分たぬ勞苦を偲ぶるとき、一人でも多くの航空士、一臺でも多くの航空機を前線に送つて、反攻し來たつた敵を撃滅することが、銃後の大責務であることを感ぜしめずには措かない。一年後の十臺、一年後の十人よりも、今、只今の一臺、一人の方が、より多く大切にあり必要なのである。百年の長計

たる教育を爲すべき大學とて、此の嚴然たる事實を無視すること許さない。百年後のことを考へるについても、此の現前の迫まつた事實に善處する務めをも怠つてはならない。此の緊迫した時局を乗り切ると否とは、實に皇國の興廢の分れる所である。

現下の大學は學問の教授及び研究のみに耽ることを許されない。研究の自由、教授の自由などに固執するを許されない。國家の要請に應へて、其の切望とする科目に力を用ひ、其の切望する問題の探求に力を盡さなければならぬ。そ

大正十一年六月十五日創刊  
昭和十八年七月十日印刷  
昭和十八年七月十五日發行  
編輯長 神戶正雄  
大正市北區堂島  
上三丁目十五番地  
印刷所 西大分 全日印刷所  
大分市大隈町長柄  
中橋三丁目十二番地  
發行所 關西大學學務部  
會員登録番號三〇六〇〇四

目要號	一二第
戰時下の大學	神戶正雄(一)
戦争と知性	森川大郎(三)
内報	(四)
校友欄	(五)
千里山圖書館南方關係圖書(四)	(八)

して、自然科学の方面にてかゝる問題の多いことは争はれない。しかし、さうだからといふて、文科系統の學問は無用なりとか、文科系統の大學は止めてしまへといふのは過ぎて居る。文科系統の歴史、地理、言語、國文、漢文、哲學のやうなものでも、更には法律、政治、經濟、經營の學問とて、凡ては戦争と同時に進行すべき大東亞建設には缺くべからざる智識を供するものである。此等のものを全く缺くとしたら、何うして十億の東亞民族を指導するの大業が完成し得られやうか、文科系統の學問が建設に必要なのみでなく、文科系統の大學教育を受けたる學生が前線に立つて兵卒を指導する上に力強いことが實證されつつあることも亦た見落してはならぬ。嘗て軍にあつては少年の純眞なる精神に目をつけて、少年航空兵を多く養つて來たのであるが、最近になつては、其外に大學専門學校の卒業生にも目をつけ、海軍豫備學生、陸軍特別操縦見習士官制度を設けるやうになつたが、此は全く文科系統の大學卒業生に於ける指導的性格の優れたるのを善用しやうといふのである。由來我國の官吏に自然科学系統の大學出身者少く、文科系統の出身者が斷然多いといふのも、其處にはたゞ其が文官試験制度の結果だといふことの出來ぬものがあり、文科系統大學出身者には指導力の嚴

存することを認めなければならぬ。

だから文科系統の大學として決して廢止すべきではなく、益々之を充實して行かなければならぬのである。此は戦争の現段階に於ても然りであり、勿論國家百年の長計として、皇國の文化を向上し、東亞に於ける指導的地位を不動のものとするにも然りである。卑近なれども卒業生の就職についても目下、文科系統出身者に何等の心配はない。之をも無視してはならぬ。だから文科系統の大學だから廢止されることありなどといふのは全く杞憂である。

ただ我國の現状にて理科系統の大學の收容力の少きことは疑を容れない。其増加擴張の望ましいことも確かである。しかし此方は經營が頗る困難であり、特に私立大學にとりては容易ならぬものがある。私立大學に於て此方に手を付けるるとすれば、其財源の工夫につきて一段と力を用ひなければならぬ。

唯だ漫然と、此に手をつけて財團の基礎を危うくせぬやう十分注意しなければならぬ。此を怠るときに、遂には其存立を危ぶまれることとなり、却て他の大學への統合を餘儀なくされることもなからう。

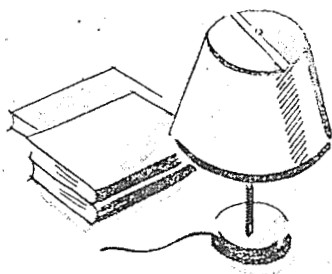
次に今日、國家が大學に要望しつつあるのは、學生の生産力擴充、食糧増産への勤勞奉仕の強化である。之が爲めには場合により、或工場、農場、鑛場に集團として移駐し勞務に参加し、其に教授が出張して指導に當り、閑暇を見計つて若干の講義をも行うといふの計畫である。此計畫は實に劃期的の事であり、嘗ての自由主義橫行時代には想像もつかなかつたことであるが、今日の決戦時にあつて、米、獨、英などにて大學生が殆んどあけて前線に出でつたのと對比し、我が國の大學生の大部分が、徴兵猶豫の特典を享けて、安んじて勉強しつたのであるから、此れしきの奉仕は、當然の

ことと爲すことが出来る。即ち我國にては學生が外國のやうに全く學業を抛棄して前線に出て居るのではなくて、學業を修めつつ銃後にあつて勤勞に従ふだけであるから、國家が戦争の要請を考慮しつつも、學問の向上、教育の徹底につきても意を用ひて居るのを多としなければならぬのである。かくて大學々生は銃後にあつて、其勞務を通じて、前線にも参加しつたことになる。

更に大學として、教練に一層の力を用ゐるのは勿論、報國團に於て國防訓練部に力を用ゐることが時局下には要請せられる。國防に縁遠い競技は今直ちに全く止めないにしても、漸次縮小せしめらるるのが、現下の情勢である。かくして大學生の生活には教練、國防訓練部への参加、産業方面への出勤助勢などの強化があるので、學問勉強の方は幾分か時間を縮められることになるのを免れず、随つては學生自身としても一段と學問

勉強を緊張しなくてはならぬのであり、到底、此迄のやうに享樂方面などに時間を用ゐるの餘暇は見出し得ぬであらう。

そして教授先生方にありても、右の現勢下に、従來の研究教授専念の態度をば改めて、時局認識の下に學生の教養指導に力を盡すことの心掛をも有たなければならぬ。且つ又、其擔當する學科目の講義に當りても、減縮を餘儀なくされたる時間内にて、其學科に屬する重要な点を要領良く講ずる工夫をしなければならぬ。



神武調

戰爭と知性

教授 森川 太郎

○ 勿論今日は苛烈な決戦下に在る。銃後の物質が

不足し、窮屈となるのは止むを得ない。國內の生活が乏しくなるのは當然だと思ふ。しかし物の不足は不足なりに、貧しければ貧しいままに、日々の生活をそれでも尙氣持よく、明朗に、能率よくさへも送ることは、決して出来ないことではない。財産があり裕福な生活をしながら、家内に風波の絶えない家庭もあれば、貧乏に暮して居ても家族皆睦み合つて、四時笑聲に満たされた家庭もあるのである。日常が氣持ちよく晴々してゐると、おなじのとは、必しも生活の質となる物質の多寡だけに依るのではないであらう。

○ うなことに、私は全く門外漢である。けれども近頃頻りに考へさせられることの一つは、國民各個人の人間としてのよき、若しくは修業の積まれてゐる程度と云ふやうな點である。或意味に於て政治も經濟も結局は人間の問題である。國民の一人一人が人間として善良にあるならば、目に餘る闇や横流れ等はないであらう。隣組の貯蓄には不平を云ひながら、コソソリ買ふ品物に金の出し惜しみをしない人も無かるべき筈である。乏しいながらも晴やかな日々が明ける。職場での、又街頭での思ひやりのある言葉や親切な行ひが、どれだけお互ひの生活感情を和げ、何事も御國への氣力を沸き立たせることであらうか。これに反して各個人の人間としての水準が低ければ、統制法令の雨下は徒らに經濟事犯の激増を結果するのみであらう。物の不足に論をかけて、日常の生活は不愉快なものになるであらうと思はれる。

○ けれども私は所謂戰時道徳や經濟論を、茲で大聲叱りやうと云ふのではない。問題は勿論これ等人間の道徳的側面にも關するけれども、私が特に云ひ度いのは各個人の所謂良識、或ひは理論的に磨かれてゐる程度である。分つてゐて悪いことをするとも云はれるが、それは寧ろ分りかたが足りないものであつて、分つて居れば此時局にあくどい惡業が行はれやう筈がない。私は寧ろ、此知的理解と遊離してお題目に道徳や倫理が叫ばれるところに、口に國家、公共の利益を稱へながら臆面もなく私利を圖るやうな、畸型的な人物が出て來るのではないかと憂へる。道義も理知の裏付けがなければ力が弱い。自分の心に納得出來ぬことに對して、勇猛心を奮ひ起し得ないのは、人間の止むを得ない性でもあらうか。

○ だから各人が知的に向上し、一層理論的に磨かれることの必要は、戰時下に於て益々必要であると云はねばならぬ。殊に敵米、英の國民は此理論的に考へ、理論的に行動する點に於ては、決して侮ることを許されぬ國民である。彼等の戦法は、素人眼に見ても、どこまでも理詰めの戦法であるやうに見える。科學兵器の極度の利用は云ふまでもない。かなはなと思へばサツサと逃げる。相手が手薄だと見れば強引に寄せて來やうとする。北阿戰後の歐洲上陸にしても、今にもやるやうに宣傳しながら、仲々やらない。神經戦を狙つたり、爆撃で痛めて其上でと思つてゐるのかも知れない。兎に角萬事2プラスからは4以外の答を抽出しないと云ふやり方に思へる。勿論いくも周到に公算しても、時に誤算もあれば、豫想外の醜態も生じ得る。又此やり方では、奇兵を用ひ算を以て衆を制するやうな藝當も出來ないであらう。其代り打つべき手はぬかりなく打つて、ジリ／＼迫ると云ふ執拗さには相當のものがあるであらう。所謂經濟戰爭の狙ひもかうした公算から出來る。近頃敵の呼號する南太平洋の反攻も此意味で決して油断を許さない。吾々はかう云ふ敵と真正面に取組んでゐる。戰爭の現段階は最早や聊かのケレンも場當りも許しはしない。敵には敵を以て、理知には理知を以て。斯くて國民知性の問題は單に國內戰時生活の問題ではないのである。

學内報

學長賜謁

去る六月十日より十二日に亘りて文部大臣官邸に於て至國官公私立大學長會議が開催され、本學より神戸學長出席、第一日の會議に先立ち文相以下出席學長等四十四名は參内して長くも拜謁を賜はつた。曩には高專校長賜謁の恩命に浴し、今又大學長に拜謁の榮を賜はり一同は教學の上に寄せさせ給ふ大御心に恐懼感激決戦下教學の本義に則り學術攻究に精進し國家有爲の人物を鍊成すべき責務の益益重大なるを痛感すると共に愈々匪躬の誠を致しつて一層御奉公の決意を固くした次第である。

夏期授業日程

本年度夏期授業日程は左の通り決定してあるが、授業休止の間に於て國民勤勞報國協力令に基き各教科別の日程表により軍需工場其他へ勤勞作業に出動する。尙一部は北海道・樺太、東京に於ける集團勤勞作業學徒講習會にも参加する。

【大學部】

授業終了 試験 授業開始  
三年 七月二日 卒業 自七月二日  
至同三日  
二年 七月二日 卒業 自七月二日  
至同三日  
一年 七月二日 卒業 自七月二日  
至同三日

【豫科】

一 豫三年 七月九日 修了 自六月六日  
至同二日  
二 豫二年 七月九日 了 自六月六日  
至同二日  
三 豫一年 七月七日 期 自六月二日  
至同二日

【専門部第一部及第二部】

三年 七月二日 卒業 自七月二日  
至八月三日  
二年 七月二日 卒業 自七月二日  
至八月三日  
一年 七月二日 卒業 自七月二日  
至八月三日

尙學部専門部卒業式並に豫科修了式は九月廿一日、學部入學試験は九月十八日施行の豫定である。

臨時協議員會開催

七月一日午後四時より新大阪ホテルに於て臨時協議員會を開き、寄附行為の一部改正につき主務省に申請中の處認可あり、協議員五名増員選挙の結果、入江眞大郎、石原孫市、須々木庄平、武田藏之助、松本茂三郎の諸氏が當選決定し四十八名となつた。次いで懇談會に移り、理工科系學科設置調査委員長白川朋吉氏の調査報告あり、種々討議を重ね散會した。

南方文化研究所

本誌前號發表の南方文化研究所は規模約により六月卅日附にて夫れ夫れ左の如く職員の囑託並に任命があつた。(尙前號に南方研究所とあるは、南方文化研究所の誤植により訂正する)

所長 神戸 正雄

所員 安藤 光、磯部喜一、飯田正一、岩崎卯一、植田重正、上道直夫、大小島眞二、岡本勝治郎、賀來俊一、片岡基太郎、加藤金次郎、川上敬逸、河村宜介、河村信一、木村健助、國藏胤臣、佐伯三郎、菅守常、高橋盛孝、瀧澤喜千雄、武内省三、中川庸太郎、中谷敬壽、中村良之助、西井克巳、野村次夫、八島治一、廣瀬捨三、福島四郎、堀正人、正井敬次、三枝樹正道、水谷揆一、三木純吉、三谷友吉、三谷道廣、村上喜貞、村田敷之助、森川太郎、矢口孝次郎、柳瀬兼助、山田松太郎、山木戸克巳、安川安太郎、吉田一枝、和田豊二、高木秀玄、評議員 野村次夫、河村宜介、正井敬次、村上喜貞、岩崎卯一、武内省三、水谷揆一、中川庸太郎、河村信一、職員 岩崎卯一、中村良之助、神屋敷民藏、信原照夫

○第一回評議員會 七月五日(月)午後六時より千里山學舎に於て第一回評議員會開催、神戸學長の挨拶、岩崎評議員の設立經過について説明あり、ついで本年度豫算並に圖書蒐集、調査研究、出版その他の項目に亘り検討協議を重ね七時半散會した。

山岡順太郎先生

胸像供出

大正十一年本學昇格當時總理事、學長

として本學の興隆に盡力され本學今日の發展に貢献せられた山岡順太郎先生の胸像は千里山學園學部正門に屹立してゐたが、決戦下國を擧げての鋼鐵の供出してゐたこととなり、去る七月八日の大詔奉戴日を期し嚴肅なる披魂式を舉行し、名残を惜しまれて米英撃滅に應召した。

下村學生主事補戰死

本學豫科學生主事補下村輝一中尉は昭和十三年十二月支那事變勃發直後應召、中文の戦線に活躍中生死不明の處、戦死を確認せられ、陸軍中尉に進級、去る七月十四日豊能郡歌垣村、歌垣國民學校に於て公葬を執行された。

かくほう抄

陸軍海軍志願 苛烈な決戦下海軍豫備學生、陸軍特別操縦見習士官の出願者は新聞紙上に傳へられる如く〇〇名の多数に上り學徒の純真なる敵愾心はいよいよ昂揚されてゐる。

▽中谷敬壽教授 日本諸學振興委員を囑託され、七月十日文部省に開催の同法學專門委員會に出席、因みに本年度法學會並に公開講演は來る十月五六七の三日間東京都において開かれる由。

▽高橋盛孝教授岡倉賞受賞

朝日新聞社出版局より發行した「樺太ギリヤク語」は我國言語學會最大の業績として表彰せられ、岡倉賞を贈られた。

校友會評議員會

本年度第二回校友會評議員會

本年度第二回校友會評議員會は去る六月廿六日(土)午後六時半より天六學會三階會議室に於て開催、神戸會長始め金澤より中西與七、岡山より神崎傳次郎氏等出席者四十六名、神戸會長の挨拶について特別委員會長松本茂三郎氏より同委員會における理工科系學科設置並に學内改革問題に對する調査報告あり、又石川支部の本問題に對する熱烈なる意見並に運動について報告あり、理工科設置問題について終始白熱的討議を重ねたる結果、左の決議をなし、午後十時閉會。

決議 關西大學評議員會へ刻下ノ要請

ニ即應シ關西大學ニ昭和十九年四月ヨリ理工科系學科ヲ設置スヘキコトヲ求ム  
右ニ關シ速カニ校友會總會ヲ開催ス  
右決議ス

秀麗會 (關東州支部)

第八十五回秀麗會例會を五月十八日午後六時より寺内通の海務協會食堂に於て開催す。當夜は最近〇〇演習が行はれると云ふので其方面の訓練へ出席された方が多かつた爲か會する者高直一、室山宇太郎、飯田昇、川野勳平、黒田健勝、北條茂義、荒川彌一郎、竹若隆三、小川

格治、鈴川勲、太平政治、近藤薫、會根三郎、伊東祐一、山下喜代志、鈴川潔、島田晃

石川支部

○支部協議會 六月十三日午後二時より金澤市外副支部長木村仁吉氏宅に於て開催、去る四月廿五日支部總會決議に係る母校理工科系學科設置事業問題に關する其の後の経過報告並に母校内外の改善助成及び全國校友支部相互間の親善強化運動方法等重要事項に關し協議を遂げ左の申合せ決議を爲した。

決議 一、當支部總會ノ決議ヲ尊重シ、母校校友會本部ノ了解ヲ得、適當ノ時期ニ於テ全國校友支部ニ對シ、母校援助ノ上理工科系學科新設事業達成目的成就ノ爲向目標奮起方要望スルコト

當日の出席者—飯田昇、秀島全治、伊達弘、毛受勝則、岩本壽三郎、黒田健勝、北條茂義、竹若隆三、小川立朝

朝鮮支部

第廿九回神宮參拜—六月六日午前八時集合、一同參拜を終つて南山亭で休憩、先づ松田清氏が株式會社松田清商店の創業十五周年記念の挨拶を次いで大塚明氏が京城府會議員當選挨拶の辭を述べれば一同に代り岡本支部長答禮の辭を述べて兩氏の前途を祝福し、十時過散會した。當日の參拜者—岡本至徳、大塚明、野田博、松田清、信田芳、高橋伊平、山田壽男、稻垣鐵五郎、田中豐次、田村

七星會

本學出身基督者を以て組織する七星會は六月廿六日、定期例會を兼ねて、最近大陸前線より目出度歸還せられた石原小四郎兄の歡迎會を開催、兄は貴い體験を語られ吾等の使命に就いて多くの感銘を與へられた。

會後、母校の近況に及び、新しく設置される大學圖書館内「南方研究所」に取敢ず左記圖書を寄贈送付した。

東亞基督教史 氣賀重躬教授著

千里山一五會

▽三警視轉出祝賀 大正十五年學部卒業生より成る一五會は會員徳竹要君が天王寺警察署長に、武良操君が港水上警察署長に、天宅俊治君が戎警察署長に夫れ夫れ轉出せられたので榮轉祝賀を兼ねて久方振りに總會を去る五月二日午後五時より天王寺「はり重」において開催した。會する者徳竹、武良の兩君に岩岸殿、大泉三郎、織田佐代治、神保敏男、角田好太郎、土井美弘、丹羽英夫、森寛紹、久保田直敏、柴田六雄、竹田繁七、山本祥市、吉川芳三郎、脇野徳三郎の十六名で十八年前の學窓時代に歸つて、大いに談じ、母校の隆盛を祈つて散會した。

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年改、算用数字は昭和年改を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は黨務動靜

大法

今中 正雄(13) 神戸市神戸區榮町通三ノ四二

岡井 泰雄(16前) 神戸市灘區琵琶町三ノ九四

荻野 武男(9) 久留米市岡分町一三三入ノ一(久留米師團經理部主計少佐)

粟木 義重(11) (滿洲國牡丹江波河、滿洲第十一部隊大田原隊臨時軍法會議法務官)

中島 輝弘(17) (久留米第一陸軍豫備士官學校副隊長)

神田 孝助(14哲) 阿部野區昭和町三ノ三

新海 泰三(5) 住吉區粉濱東之町三〇

道家 誠之(17) (豊橋陸軍教導學校第二中隊第三區隊)

有本 直弘(16後) 徳島市西新町四ノ二

池 吉彦(16前) 津山市鍛冶町二〇

島田 吉二(13) (奈良縣高田町、日本鑛鋼所高田工場)

大上 岩治(13) 佐世保市戸尾町七五憲兵隊官舎(憲兵大尉)

富田 真督(三) (昭南特別市パツテリ路三〇、南方運航會社)

青木 義雄(13) (滿洲國興安北省海拉

新名 武男(16前) 立川市高松町、立川飛行機會社(事務課)

谷村 修(10) (新京特別市大田大街國務院建築局)

塚水 範夫(9) 福岡縣浮羽郡千年村千

澤田喜久雄(16前) 城東區鳴野町九七八

大法

年四一九(福岡縣浮羽郡地方事務所)

鳴谷 善三(12) 東住吉區平野中町一四

鈴木 匡(7) 愛知縣愛知郡鳴海町相原町一四

土井 達夫(8) (大阪逓信局貯蓄部保險第二課)

廣瀬 元亮(4) 釜山府水島町一〇二八(東光被服工場)

牧野成道(15) 高文行政科筆記試驗合格

森川 勝彦(13) 佳木斯市南崗五慈久街一〇九一號官舎(三江省屬)

和田 義爲(明30) 長野縣諏訪郡富士見村向原三一〇九

石橋 榮市(2) 門司市大里上柳二區

梅田 貞一(14) 西宮市松生町一三三

龜有 正男(13) (日本電球工業組合總務部大阪事務課)

至田 憲二(15) (豊橋陸軍教導學校岩倉隊第三區隊)

富田 真督(三) (昭南特別市パツテリ路三〇、南方運航會社)

青木 義雄(13) (滿洲國興安北省海拉

矢野 健勝(5) 大連市土佐町四六

川瀬 茂(12) (南區大寶寺仲之町、大阪市立大寶女子商業學校)

鳴井 辰夫(四) 堺市曙尾四一四(毎日新聞社普及部)

奧田甚之助(三) (大阪府食糧營團郡島支所、副支所長)

爾市中之島、滿洲生活必需品會社海拉爾支店)

天野 律司(3) (京城府櫻井町一ノ三)

一、日蓄工業會社京城支店)

有田 幸三(明44) (西區立賣堀南通五ノ六、井ガタ鋼管工業會社)

井上 好(9) 東住吉區平野西臨町三

裏野 三治(四) 吹田市垂水一一二九

尾原 淳夫(14) 西宮市相生町六一、甲南莊

川瀬 茂(12) (南區大寶寺仲之町、大阪市立大寶女子商業學校)

鳴井 辰夫(四) 堺市曙尾四一四(毎日新聞社普及部)

奧田甚之助(三) (大阪府食糧營團郡島支所、副支所長)

矢野 健勝(5) 大連市土佐町四六

川瀬 茂(12) (南區大寶寺仲之町、大阪市立大寶女子商業學校)

鳴井 辰夫(四) 堺市曙尾四一四(毎日新聞社普及部)

奧田甚之助(三) (大阪府食糧營團郡島支所、副支所長)

矢野 健勝(5) 大連市土佐町四六

川瀬 茂(12) (南區大寶寺仲之町、大阪市立大寶女子商業學校)

鳴井 辰夫(四) 堺市曙尾四一四(毎日新聞社普及部)

奧田甚之助(三) (大阪府食糧營團郡島支所、副支所長)

矢野 健勝(5) 大連市土佐町四六

川瀬 茂(12) (南區大寶寺仲之町、大阪市立大寶女子商業學校)

昭16專二法 長田喜久雄

昭9大法 野口武男

昭13專二法 藤本善三

昭4專法 廣瀬竹治

昭16專一商 山瀬博一

昭8專二法 山地文雄

越智 弘(昭6專法) 主計中尉としてビルマ戦線に従軍中

マ戦線に於て敵砲彈の爲め大腿部貫通

壯烈な戦死を遂げられた。遺族・今治市郷二九一(父・越智武殿)

川田喜代治(昭14大經) 北支に出征軍務に精勤中病死、遺族布施市荒川三ノ七

○兄川田藤太郎殿

齋藤 敬宗(昭17專二法) 五月三日逝去

遺族南河内郡駒ヶ谷村大黒齋藤徹心殿

會和 昭之(昭16專二經) 昨十一月十四日戦死の公報あり、遺族港區辨天町四ノ一五、父會和己之助殿

高梨 乙松(大9專法) 代議士、辯護士、校友會役員として母校の爲にも盡力されたが、去る七月六日敗血症にて急逝、遺族は都島區中野町三ノ一三、嗣子高梨治一殿

長尾徳太郎(昭13專一經) 南方に出征中一月十八日名譽の戦死、遺族池田市東市場一〇ノ一、父長尾喜太郎殿

錦 保一(昭16專二商) 去る一月六日ニユギニヤ戦線に於て散華する遺族

大正區榎町二ノ三〇(父・錦一殿)

横山 孝美(昭16專二法) 逝去、遺族三島郡茨木町上條、父横山佐久馬殿

改姓名

昭10專二法 北浦正雄

昭13大法 北浦正雄

大15大商 佐中淳七

昭15專一商 高義男

昭15專二商 永松均

昭17大商 永松均

昭10專二法 北浦正雄

昭13大法 北浦正雄

大15大商 佐中淳七

昭15專一商 高義男

昭15專二商 永松均

昭17大商 永松均

改姓名

昭10專二法 北浦正雄

昭13大法 北浦正雄

大15大商 佐中淳七

昭15專一商 高義男

昭15專二商 永松均

昭17大商 永松均



千里山圖書館購入南方關係書(其四)

印度

- 岩佐 義夫著 セイロン島事情 昭和17 千倉書房
- 大谷 光瑞著 印度地誌 (附)マダガスカル地誌 昭和17 有光社
- 佐野 甚之助著 印度及印度人 大正6 丁未出版社
- 須田 禎一著 印度五千年通史 昭和17 白揚社
- ノ聯百科辭典編 印度 叢本 昭和17 慶應書房
- 宮城 駿介譯
- Gordon, T. E. 著 世界の屋根 昭和17 生活社
- 田中 一呂譯
- Loss, D. & Skrine, H. トウルケスマン 昭和15 同社
- 三橋 富士男譯

經濟・産業・商業

論 說

- 今村 忠男著 軍票論 昭和16 商工行政社
- 景山 哲夫著 南方建設の根本政策 昭和17 明善社
- 川西 正鑑著 國防經濟立地論 昭和17 日本評論社
- 金田 近二著 南洋及印度經濟研究 昭和17 晃文社
- 坂入 長太郎著 東亞産業立地の研究 昭和17 東洋書館
- 谷藤 榮三郎著 大東亞共榮圏の通貨工作 昭和17 光文堂
- 齋 口吉彦著 大東亞經濟の理論 昭和17 千倉書房
- 角田 藤三郎著 大東亞農業經濟の再編成 昭和17 朱雀書林
- 東京南大東亞經濟研究所編 東亞經濟研究年報 第1輯 昭和17 日本評論社
- 滿鐵調査部編 滿洲經濟研究年報 昭和16 收造社
- 吉田 秀夫著 大東亞國土計畫論叢 昭和17 官界公論社
- 山口 高商・東亞經濟研究會編 東亞共榮圏の建設問題 昭和16 生活社

經濟史・産業事情一般

- 淺香 米起著 南方交易論 昭和18 千倉書房
- 大谷 光瑞著 熱帶農業 昭和17 大乗社
- 鹿兒 島水産場編 南洋之經濟
- 試 驗
- 協 調 會 編 南方共榮圏の労働問題 昭和17 同 會
- 教育農藝聯組編 東亞の農業資源 昭和17 地人書館
- スラバヤ日本所編 漁業資料 昭和4 同 所
- 商品陳列所編
- 外山 卯三郎著 日葡貿易小史 昭和17 若い人社
- 臺灣總督官房編 布哇大學に於ける パインアップル事業に 大正15 臺灣總督府
- 調 査 課 編 關する講演 (1933年)
- 茶 業 組 合 編 海外に於ける 製茶事情 大正15 同 所
- 中央會議所編
- 大谷 喜光著 フイリツピンの 經濟資源 昭和17 東亞政經社
- 蒲 池 清著 ビルマの經濟資源 昭和17 同 社
- 日本國際問題編 列國資源動員の現勢 昭和17 日光書院
- 調 査 會 編 列國資源圖 昭和17 同 院
- 農林省編水産局 南方漁業調査報告書 昭和7年度 農林省
- 福原 一雄著 南方林業經濟論 昭和17 霞ヶ關書房
- 福 田 要著 南方資源經濟論 昭和17 千倉書房
- 丸川 久俊著 たらばがに調査 昭和8 日本蠶繭詰水産組合聯合會
- 渡邊 東雄著 南方水産業 昭和17 中興館
- Callis, H. G 著 東南亞細亞に於ける外國投資 昭和17 同盟通信社
- 日本國際協會編

日本・滿洲・支那

- 井 島 重保著 滿蒙に於ける綿羊及羊毛 昭和8 井島重保
- に關する踏査報告概要
- 岡田 巧著 近世支那社會經濟史 昭和17 教育圖書社
- 小竹 文夫著 近世支那經濟史研究 昭和17 弘文堂
- 齋藤 榮三郎著 支那の人的資源調査資料 昭和17 伊藤書店
- 杉 村 廣藏著 支那・上海の經濟的諸相 昭和17 岩波書店
- 江西省農學院編 江西米穀運銷調査 昭和15 生活社
- 農業經濟科編
- 拓務省拓務局編 中南支那方面に 昭和13 拓務省
- 於ける水産事情
- 臺灣總督官房編 支那産業の現況第3卷 大正13 臺灣總督府
- 調 査 課 編
- 臺灣總督府編 南支那・比律賓近海に於ける 同 府
- 漁業試驗
- 同 上編 江蘇省・浙江省水産業 同 府
- 臺灣案内社編 臺灣南支事情 大正7 同 社
- 臺灣總督官房編 香港の港勢と貿易 大正11 臺灣總督府
- 調 査 課 編
- 武 山 卿著 魏晉南北朝經濟史 昭和17 生活社
- 宇都宮清吉共譯
- 増村 宏著
- 中支建設資料編 海 南 島 昭和15 同 會
- 整備委員會編
- 帝國農會編 南洋・北支に於ける農 昭和14 同 會
- 産物販路調査報告彙録
- 東亞同文館編 東亞同文館東亞調査報告書 昭和17 同大學
- 書院大學編
- 日本學術振興會編 支那の通貨と貿易 昭和17 有斐閣
- 日滿中央協會編 日滿支經濟懇談 昭和14 日滿中央協會
- 會報告書
- 平野 著著 滿洲の農業經營 昭和16 中央公論社
- 平瀨己之吉著 近代支那經濟史 昭和17 同 社
- 秀島 達雄著 香港・海南島の建設 昭和17 松山房
- 福大公司企畫課編 南支經濟叢書第1卷 昭和14 福大公司
- 同 編 同 第3卷 昭和15 同 公司
- 貿易獎勵會編 海南島の研究 昭和14 貿易獎勵會
- 滿鐵調査部編 北支那の農 上 下 昭和17 日本評論社
- 業と經濟
- 松崎 雄二郎著 北支經濟開發論 昭和15 ダイアモンド社
- 和田 保著 水を中心と北支那の農業 昭和17 成美堂
- Schumpeter, E. B. 著 雪山慶正共譯 日滿産業構造論第1卷 昭和17 慶應書房
- 三浦 正

印度支那・マライ半島

- 印度支那協會編 佛領印度支那の農業 大正15 同 會
- に關する調査報告書
- 華南銀行編 新嘉坡に於ける邦人水産業 同 行
- 櫻井 祐吉著 支那貿易家・角屋七郎兵衛 昭和4 同 氏
- 永 福 虎著 新嘉坡に於ける漁業狀況
- 新嘉坡南編 英領馬來に於ける 南洋協會
- 品 陳 列 所 編 水産物取引狀況
- 向井 章著 印度支那の水産業
- Furnivall, J. S. 著 緬甸の經濟 昭和17 東亞研究所
- 東亞研究所譯

マライ群島・濠洲

- 江川 俊治著 關領東印度北モルツカス群島經濟 業並に同地方沖繩縣漁民の狀況
- 臺灣總督府編 比律賓並にボルネオ・セレベス 近海に於ける漁業成績報告